

# 博士学位論文審査要旨

2011年7月30日

論文題目： 「日本の役割」の論じ方  
－「トリックとしての国際貢献」をめぐって

学位申請者： 丸楠 恭一

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 武蔵 勝宏

副査： 総合政策科学研究科 教授 月村 太郎

副査： 京都産業大学外国語学部准教授 高原 秀介

要 旨：

本論文は、「世界の中の日本の役割」を論じる「役割論」を読み解く思考の枠組を提示した上で、1990年代初頭における国連平和協力法案の審議・成立の政策過程と「国際貢献」なる政策造語との相互関係性を描き出し、役割論の議論と現実の対外政策との相互的影響を明らかにしようとするものである。

本論文は、大きく二つに分かれる。まず、第1部では、役割論が広義の日本論に含まれ、日本論一般の分析枠組を役割論に援用した理解が可能である点が示され、国際社会における価値尺度として西洋が遍く普遍性を有する構造の中で、戦後日本の特質や役割をその特殊性の中に位置づける視座が指摘される。

続く第2部では、1990年代初頭の役割論について対外政策の形成過程との関係性から考察が行われる。まず、第3章では、役割論の分析視座として、国際社会において、西洋から提示された価値尺度や西洋のルールに則ったゲームをプレイすることを受容し、その中で自らの立ち位置を見出す認識としての「オリエンタリズム的役割観」の重要性が指摘される。第4章及び第5章は、終戦直後から1970年代までの吉田路線についての役割論からの解釈と、1980年代における役割論とその時代的文脈との相互関係が検討される。戦後日本外交の基本路線を構築した吉田茂は、オリエンタリズム的役割観を表面的には否定しつつもその構造に半自覚的であったとの解釈を提示し、他方で、吉田以後の「吉田路線」では、役割論的要素が後退していったことが論じられる。続く1980年代は、吉田によって設定された「小日本路線」からの本格的脱却をめぐる諸議論が展開された時代である。その先駆けとなったのが、大平正芳によって設置された政策研究会である。同報告書で案出された「総合安全保障」なる新語の背後には、大平のオリエンタリズム的世界観への一定の理解が見てとれることが指摘される。続く中曽根政権期では、中曽根がオリエンタリズム的役割観を意図的に封印し、日本の特殊・異質性を弁明的に強調する議論を退け、日本の役割を普遍妥当性から導き出そうとしたが、その背後にあるオリエンタリズム的構造について中曽根が自覚的であったという解釈が提示される。

第6章では、1990年代初頭に「国際貢献」なる語が創出されたことに注目し、この語の発生から頻用に至る過程及び国際貢献をめぐる展開された議論と現実の動きの相互関係について分析的理解が試みられる。ポスト冷戦下で湾岸戦争が勃発した90年代初頭は、「日米同盟路線」と「国連中心主義」という日本外交における「相矛盾する2つの原則」が両立するかに見えた時期であった。こうした環境下で、1989年の参院選において大敗した自民党は、国会運営において公明党や民社党など中道政党の協力を必要としていた時期に国連平和協力法案が俎上に上ったため、憲法や自衛隊等について異なる認識を持つ複数の政治勢力のすべてが同床異夢状態の中で受

容可能な政策用語を創出する必要に迫られ、この中で「国際貢献」なる多義的な語が重要な役割を演じることとなったとする。終章では、90年代初頭に役割論の大きな転換が見られたという一般の見解に対し、オリエンタリズム的世界観はその底流に生き続けており、さらに、役割論が日本のありようや日米関係に一定の能動的な役割を果たしてきたこと、そしてそれが意図せざるトリック(日本外交が抱える矛盾の存在を認識し、それに悩みつつも懸命に改善に努めてきたという姿勢が決して偽りでなく日本の本心から出ている、と米国に認識されること自体が日本外交の基本構図であった)として機能した可能性があることを論じ、日本の政策空間や言論空間における役割論の流通・消費が意図せずして演じてきた役割の重要性を主張し結論としている。

本論文は、「政策造語」という概念を提示しこれを日本政治に適用しようとした試みであり、アクター分析的視点を前提として、政治家、官僚、知識人、メディア等の諸行為者が「ことばの創出、流通、消費」に関して多元主義的なゲームを演じているという政治・政策社会観を提示することで政治と言語・コミュニケーションの相関を明らかにした先駆的な研究として位置づけられる。また、日本外交を理解する分析枠組として、エドワード・サイードの提示した「オリエンタリズム」の概念を援用した「オリエンタリズム的役割観」なる視座を提示することで、90年代日本の新保守主義が80年代米英の新保守主義とその普遍思考的性格を共有していた、という一般的な解釈に対して対抗的見解を提示するものとして注目されよう。このように、本論文は現代日本の国内政治及び対外政策形成過程に関する新たな知見を提示し、一定の研究成果をあげたと評価することができる。

もともと、分析の対象において、戦後日本の役割論に焦点が当てられ、明治以降の日本との歴史的接続性の視点がやや手薄であるという若干の課題は残るが、それは単行本という紙幅の制約から記述の分量を割愛せざるを得なかったという事情に起因するものであり、本論文が、いまだ十分に研究がなされていない現代日本の対外政策形成過程と役割論との相互的影響を理論的・実証的な手法で解明したことの意義を減じるものではない。

よって、本論文は、博士(政策科学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 学力確認結果の要旨

2011年7月30日

論文題目： 「日本の役割」の論じ方  
－「トリックとしての国際貢献」をめぐって

学位申請者： 丸楠 恭一

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 武蔵 勝宏

副査： 総合政策科学研究科 教授 月村 太郎

副査： 京都産業大学外国語学部准教授 高原 秀介

要 旨：

申請者の学位申請論文について、2011年7月23日9時15分より10時20分まで約1時間余りの公聴会を実施し、口頭試問を行った。まず、申請者である丸楠氏より、約35分間の口頭報告を聴取したのち、月村、高原及び武蔵の三人の審査委員による質疑とそれに対する丸楠氏からの応答による審査を約30分間にわたって行った。

審査委員からは、①日本の役割論の言説が政策に影響を及ぼした分析は示されているものの、政策が言説に反映される関わりについての分析も必要ではないか、②日本からの役割論のみならず米国から見た場合の役割論が日本の議論に及ぼした影響はどのようなものであったのか、③戦前日本、特に明治以降の役割論と戦後日本の役割論との関係をどのように捉えているのか、さらには、④本論文で提示されたオリエンタリズム的視座と政策造語にはある種の対抗関係が存在したのではないかと。すなわち、日本の対外政策において、政策決定者の中でオリエンタリズム的役割観が底流に存在してきたにもかかわらず、それを表面化させず、状況対処的に政策造語が援用されて外交政策が展開されてきたその要因は何か、他方で、⑤対外政策の推進に当たって、理念や価値観に裏付けられた政策展開ができないのはなぜか、⑥日本が直面している具体的課題への成果をどのようにすれば上げることができるのか、そして、⑦与野党間の対立を協調に向かわせる機能を持った政策造語が90年代において成功したものの、2000年代の対外政策においては失敗に終わっている要因は何かといった各項目についての指摘と質問がなされた。

これに対して、丸楠氏からは、①に関して、政策が言説に結び付けられることはいわば自明のことであり、逆に言説が政策過程にどのような含意をもったかについての分析に焦点を絞った結果であること、②に関して、米国からの日本に対する役割論は、いわゆる知日派とされる層からの言説が展開され、それらの多くは日本の知識層とアイデアを共有して、90年代に見られた日本異質・特殊論に対して、日本のバッファーとなる面を有していたこと、③に関しては、明治期の福澤に見られるように、国際関係の矛盾点は当時から意識されていたこと、④に関して、政策決定者がオリエンタリズム的役割観を前面に出すことは日本の国益を損ねることになること、そのため、そうした事態を回避するために意図的に抑えられてきたと考えられること、⑤及び⑥に関して、日本の政治が理念や価値を裏付ける外交政策の提案ができない背景には、日本が西歐的普遍性に対する特殊性という運命を背負っている点に加えて、政治が意思決定をしにくい政治制度や世論の影響があげられること、それを踏まえた上で、政治が具体的課題への成果を実現していくためには、執政部が強いリーダーシップを発揮するよりも、むしろ改良を目指して方向性を出せるような一定の価値の提示をしていくべきであること、そして⑦に関しては、90年代には国際貢献なる政策造語が保守勢力と公明党との接近を図る触媒的機能を果たしたのに対し、2000年代

では、自公連立政権と民主党の間には、安全保障政策をめぐる専門性にギャップは存在せず、政策面での一致がなければ妥協は困難になった点が考えられるとの応答がなされた。

丸楠氏の説明と応答は、質問者の指摘に対して、的確かつ説得力を十分にもつものであり、論文についての研究上の論点や視点を明確に示すものであった。

以上の審査の結果から、申請者が、現代日本の政治過程及び政治社会学に関する専門分野に関して、十分な研究能力と学力を有することが確認できた。また、申請者の論文では、先行研究や関連研究の分析において、外国語文献が各所に参照されており、その内容の理解、引用においても問題のないことを確認した。したがって、申請者の外国語能力(英語)についても、十分な能力を有すると判断した。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認められる。

# 博士學位論文要旨

論文題目：「日本の役割」の論じ方 - 「トリックとしての国際貢献」をめぐって  
氏名：丸楠 恭一

要旨：

本論文の主題は、「世界の中の日本の役割」に関する議論（以下「役割論」）と現実の対外政策との相互的影響を、事例に基づいて検討することである。この主題を取り扱うため、本論文は2つの分析視角を設定して考察を行った。

## 第1部 「日本」はどう論じられてきたか

第1部において提示した本論文の第1の視角は、役割論が広義の日本論に含まれ、日本論一般の分析枠組を役割論に援用した理解が可能だという点である。

### 第1章 「世界の中の日本の役割」論

本章では、第1節で問題の所在を論じ、第2節では日本論の分析枠組に関連する先行研究を検討した。続く第3節では日本論全般に関する検討を行い、「特定の時期に広く受容された日本論の内容が政・官・財・メディア等にフィードバックして現実の構築に寄与する」等の点を論じた。

以上を踏まえ、日本論の一般的傾向が役割論に影響を与え、それが現実の日本外交の姿勢に影響を与えるという見解を提示した。

### 第2章 日本を論ずる視座

本章では、役割論を含む日本論を考察する際の4つの視座を提示し、その内容を検討した。

第1節では、テキストが生産・流通・消費される過程それ自体を社会現象として捉える「知識の社会関係」について考察し、日本論を解釈するには現実との相互的關係や時代的文脈等が重要であると論じた。そして役割論が日本論一般に比べ高度に政治的であり、公共政策形成において能動的な役割を果たす立場の人間が生産者となる場合が少なくないことを論じた。

第2節では、日本の近代化体験における「非西洋のフロントランナーという位置づけ」及び「翻訳抽象語による知的営み」とその影響に関して検討した。前者については、「西洋に最も接近した非西洋」という位置づけの定着が近代化に対する両価的心理をもたらし、日本の進歩を肯定する姿勢に根ざした親英米論と「進歩の副産物」に着目するアジア主義的議論が、その時代状況によって交互に現れることについて議論を整理した。また後者については、翻訳主義の採用・定着により、現実の変革を企図する際等にしばしば新造語の創出が促され、それがリアリティの形成に寄与することを論じた。

第3節では、日本らしさの可変性と「可変性の高さという日本らしさ」との関連について検討し、融合統合型文化触変が優位な日本では役割論において「改革」「総合」「対立を乗り越える」等の用語が頻用されることに関して、事例を踏まえて論じた。

第4節では、「テキスト」「社会科学」「西洋」等が持つ政治的性格について考察し、戦後日本の役割論が、実は「価値尺度としての西洋」の強化に寄与し、その中で日本が特殊な存在として位置づけられがちであることを指摘し、さらにその特殊性が日本の存在意義の源泉と見なされる時、日本は西洋の普遍性を揺るがす面を持つと論じた。そして日本論と「米国という特殊存在」との関係を踏まえ、役割論は「日本が特殊と位置づけられる構造をどう引きつけていくか」とい

う面から理解されうる、と論じた。

## 第2部 1990年代初頭「日本の役割」論の再検討

第2部において提示した本論文の第2の視角は、1990年代初頭の役割論を日本論との関係性の中から再解釈することである。

### 第3章 「役割論」に関する考え方の枠組

本章では、役割論に関する考え方の枠組を整理した。

第1節では、役割論の分析視座として「日本社会に対する肯定的認識度の強さ」「日本の異質性・特殊性に対する自己認識」「オリエンタリズム的認識の強さ」の3つを提示し、中でも「オリエンタリズム的役割観 = 国際社会において、西洋から提示された価値尺度や西洋のルールに則ったゲームをプレイすることを受容し、その中で自らの立ち位置を見出す認識」の重要性について論じた。

第2節では、「国際日本主義」「大日本主義」「小日本主義」等の役割モデルに関連する諸概念の整理軸を提示した。

### 第4章 先行する時代の考察(1)「小日本路線」の確立とそれをめぐる諸議論

本章では戦後期から1970年代までに焦点を当て、吉田路線を役割論という視点からどう解釈するかについて、時代的文脈を踏まえて議論を整理した。

第1節では、敗戦の衝撃の中で米国から事実上押しつけられた「平和憲法」を受容するにあたり、これが「世界の中で先駆的な役割を果たす」と認識されることでナショナリズム再構築の拠り所となり、当時の「日本の役割」を論ずる際の基軸的用語の一つとなったことを示した。さらに、戦後日本外交の基本路線構築に寄与した吉田茂が、オリエンタリズム的役割観を表面的には否定しつつもその構造に半自覚的であった、という解釈を提示した。

第2節では60年代半ばまでの時代状況を整理し、「吉田以後の吉田路線」から役割論的要素が後退していったことを論じた。第3節では60年代半ばから70年代にかけての国内外情勢を整理し、この時期が次の「役割論本格化の時代」の助走期を成したことを論じた。

### 第5章 先行する時代の考察(2)「小日本路線」からの本格的脱却をめぐる諸議論

本章では、1980年代における役割論とその時代的文脈との相互関係を検討した。

第1節では、米国の衰退と日本の台頭が喧伝され戦後日本の「小国路線」が批判に晒された1980年前後が「役割論の本格期」であったと論じた上で、「大平正芳総理の政策研究会報告書」と総合安全保障の概念に関して検討した。そして、大平委員会報告書の日本認識が、戦後日本の「成功」に対する肯定的認識と近代化に対する懐疑的姿勢を共に有する点で両面的であると主張し、そうした中で創出された「総合安全保障」なる新語の背後に、大平のオリエンタリズム的世界観への一定の理解が見てとれることを論じた。

第2節では、1980年の総合雑誌上で展開された議論を検討し、多様な論者の主張の背景に存在するオリエンタリズム的世界観の受容の差異を指摘した。そして、「小日本主義の維持」と「国際日本路線への転換」の接点に位置づけられる天谷直弘の論考をめぐる動きに着目し、「軽武装路線の定着」と「経済大国化、自文化肯定的認識」の狭間で日本の役割認識にねじれが表面化していた1980年代初頭において、オリエンタリズム的世界観はそのねじれを「引き受ける姿勢」と親和的であったと論じた。

第3節では、中曽根政権期に見られる国際日本主義への転換に関する議論が、実は大平期の諸議論と内容的に強い連続性を持っていたことを示し、これを踏まえ、中曽根がオリエンタリズム

的役割観を意図的に封印し、日本の特殊・異質性を弁明的に強調する議論を退け、日本の役割を普遍妥当性から導き出そうとしたこと、しかしその普遍妥当性の背後にあるオリエンタリズム的構造について中曽根が自覚的であったという解釈を提示した。

## 第6章 1990年代初頭の考察

本論文の中心を成す第6章においては、オリエンタリズム的世界観が表面的に後退したように見えた1990年代初頭に「国際貢献」なる語が創出されたことに注目し、この語の発生から頻用に至る過程及び「国際貢献」をめぐる展開された議論と現実の動きの相互関係について分析的な理解を試みた。

第1節では、90年代初頭の国内外環境を検討し、ポスト冷戦下で湾岸戦争が勃発し、国連主導による紛争解決に一縷の期待が寄せられていた90年代初頭が、「日米同盟路線」と「国連中心主義」という日本外交における「相矛盾する2つの原則」が両立するかに見えた時期だったことを指摘した。そして、当時の日本政府の大きな課題の一つは、世界的に蔓延していた「日本異質論的空気」の解消に努めることであり、こうした状況が役割論に関する新語の創出を促したと論じた。

第2節では、前述のような環境下で「国際貢献」なる語がメディア、国会審議、論壇等で多義的に用いられ定着していく過程を時代的文脈に即して論じた。すなわち、1989年の参院選において大敗した自民党が、国会運営において公明党や民社党など中道政党の協力を必要としていた90年代初頭という時期に国連平和協力法案が俎上に上り、憲法や自衛隊等について異なる認識を持つ複数の政治勢力のすべてが同床異夢状態の中で受容可能な政策用語を創出する必要に迫られ、この中で「国際貢献」なる多義的な語が重要な役割を演じたことを論じた。

以上の内容を踏まえて「政策造語としての国際貢献」という観点から検討を加え、知的営為の大部分が翻訳語を交えた言語体系の中で行われてきた近現代日本においては、政策形成過程の中に「政策造語の創出、用例の蓄積・再定義」という現象が頻繁に見られると指摘し、日本では新規政策の実施、従来政策の変更等の諸段階で創出される政策造語が、言葉自体の持つ機能のゆえにメディアや知識人によって頻用され一般大衆に受容され、多義性を内包したまま用例を重ねていくという特質が観察され、「国際貢献」がそうした政策造語の典型例であると論じた。

## 終章 暫定的結論...「役割論」の意図せざるトリック

終章では第2部を中心に全体を総括し、90年初頭に役割論の大きな転換が見られたという一般の見解に対し、この時期一見後退したかに見えたオリエンタリズム的世界観はその底流に生き続けており、その意味で以前との連続性を有していたという解釈を提示した。

さらに、役割論が日本のありようや日米関係に一定の能動的な役割を果たしてきたこと、そしてそれが「意図せざるトリック」=「日本外交が抱える矛盾の存在を認識し、それに悩みつつも懸命に改善に努めてきたという姿勢が決して偽りでなく日本の本心から出ている、と米国に認識されること自体が日本外交の基本構図であったこと」として機能した可能性があると論じ、日本の政策空間や言論空間における役割論の流通・消費が意図せずして演じてきた役割の重要性を主張して結びとした。